

2017年8月23日（水）  
日本リメディアル教育学会  
第13回全国大会  
日本文理大学

# 日本語学術共通語彙知識の発達

## （義務教育課程と高等教育課程での習得状況の比較）

田島 ますみ（中央学院大学）  
佐藤 尚子（千葉大学）  
松下 達彦（東京大学）  
笹尾 洋介（京都大学）  
橋本 美香（川崎医科大学）

## 予稿の訂正

予稿集p.141 5 考察 1行目

「大学Aの学生22.3%がC市の中3の平均点を下回った」

22.3% → 21.7%

# 発表の流れ

1. 研究動機（先行研究：日本人大学生の語彙知識）
2. 研究課題
3. 方法（日本語学術共通語彙テスト・実施対象等）
4. 結果と考察
  - 学年別
  - 大学別
  - 学年／問題レベル別
6. 限界と今後の課題

# 研究動機

## (先行研究：日本人大学生の語彙知識)

日本人大学生の語彙力の問題：数量的観点の論拠の不足

→ 何らかの測定・数値化ができないか

### 成人の語彙量（理解語彙）に関する先行研究

- 阪本（1955） 18歳：約50,000語
- 林（1971） 20歳：48,000語
- 中尾ほか（2012） 女子大学生：34,900語
- 松浦（2015） 大学1年生：33,611語
- 荻原（2016） 大学4年生：45,354語

# 研究動機

## （先行研究：日本人大学生の語彙知識）

理解語彙量に関する先行研究に基づき、大学で学ぶ日本語使用者の語彙量を測定することを試みた

- 田島ほか（2016a）、佐藤ほか（2017）  
日本語を読むための語彙サイズテスト（VSTRJ-30K, 50K）  
（すべての語彙の頻度上位30,000語、50,000語まで測定）
  - \*概ね高得点 推定理解語数約40,000語（←41,850語）
  - \*極端な低得点者が一部の大学に少数存在する
- 田島ほか（2016b）  
学術共通語彙テスト Ver.1（頻度順位20,000語レベル）
  - \*正答率は50,000語レベルの一般語彙テストと同程度
  - 一般語彙に比べ学術語彙の理解度が低い傾向
  - \*低得点者 → 学術的な文献を読むのに支障が出るレベル？

# 研究課題

Q. 学術的な文献を読むことに支障が出るレベルの語彙量しか習得していないと示唆される大学生は、語彙知識の発達の中のどの段階で停滞しているのだろうか



Q 1. 日本の大学生および小学校 4 年生から中学校 3 年生の学術共通語彙（松下2011）の習得レベルはどの程度か

=どのように発達していくのか

Q 2. 日本の大学生の学術共通語彙の習得レベルは、学校間、学生間でどの程度異なるか

Q 3. 日本の大学生にとって習得されやすい語彙とされにくい語彙には、それぞれどのような特徴があるか

# 方法（学術共通語彙テスト Ver.2）

## 「学術共通語彙テスト」 Version 2

- 対象語彙：学術共通語彙（松下2011）
  - 一般的テキストと比較して学術テキストにおいてジャンルを問わず使用率の高い語彙
  - 基本語彙と専門語彙の中間に位置する
  - 学生・生徒にとっては基本語彙の次に重要
  - 「占める」「優れる」「当初」「減少」「強化」「取り上げる」など、範囲・関係・段階・量的変化・論述の展開といった、抽象性の高い論理操作に不可欠な語が多い

# 学術共通語彙テスト Ver.2

小中学生が受けることを考慮し、漢字の学年配当を対象語の選定基準に追加してテストを全面的に作成し直した

→ Version 2

- 対象語75語の再選定

＜前回 = Version 1（田島ほか2016b）の選定基準＞

学術共通語彙リストの中の語を頻度順位に従い、上位20,000語の中から250語に1語の割合で、可能な限り等間隔で選定

ただし、旧日本語能力試験の4級および3級の語彙を除外  
(高頻度の基本語彙のため)



# 学術共通語彙テスト Ver.2

＜Version 2 =本研究＞

- 選定基準に頻度順位のほか漢字の学年別配当を追加
- 上位20,000語以内の学術共通語彙の漢字の学年別割合を調べ、その割合をテストの対象語75語に反映
- 学年配当の基準を満たす語で、基準頻度順位に最も近い語を対象語として選定

## 問題の形式

対象語を含む文や語句を示した上で、語義を問う 3 肢選択問題  
(Version 1 と同じ)

# テスト問題の形式例

帰結：<sup>ひと</sup>一つの帰結である。

1) 行<sup>い</sup>ったり来<sup>き</sup>たりする<sup>かんけい</sup>関係

2) 最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>にま<sup>かんが</sup>とま<sup>じょうたい</sup>った<sup>い</sup>考<sup>え</sup>えや状<sup>じょう</sup>態<sup>たい</sup>

3) 初<sup>はじ</sup>め<sup>で</sup>に出<sup>もんだい</sup>てきた<sup>い</sup>問<sup>もん</sup>題<sup>だい</sup>

# テスト実施概要

- **大学生 2017年4月**  
2 大学で計396名（大学A：327名、大学B：69名）  
1 年生：376名      2 年生：18名      3 年生：2名  
1 年次配当日本語科目の授業時間内に実施
- **小中学生 2016年9月**  
首都圏郊外C市の公立小学校 4 年生～中学校 3 年生、計3,626名  
（ほぼ全員）  
小学生：1,874名、中学生1,752名

# テスト実施概要

- 実施時間：30分（3肢選択、75問）
- 問題を乱数を使ってランダムに並べなおした  
二つのバージョンA（n=2049）、B（n=1976）  
A（平均44.3、標準偏差15.1） B（平均44.7、標準偏差15.7）  
t検定  $t(4023) = -.783$ , n.s. 効果量  $r = .01$ （小さい）  
⇒ 二つのバージョンに差はない  
練習効果、疲労効果はない
- 内的一貫性：クロンバック  $\alpha = .95$   
⇒ 信頼性が高い

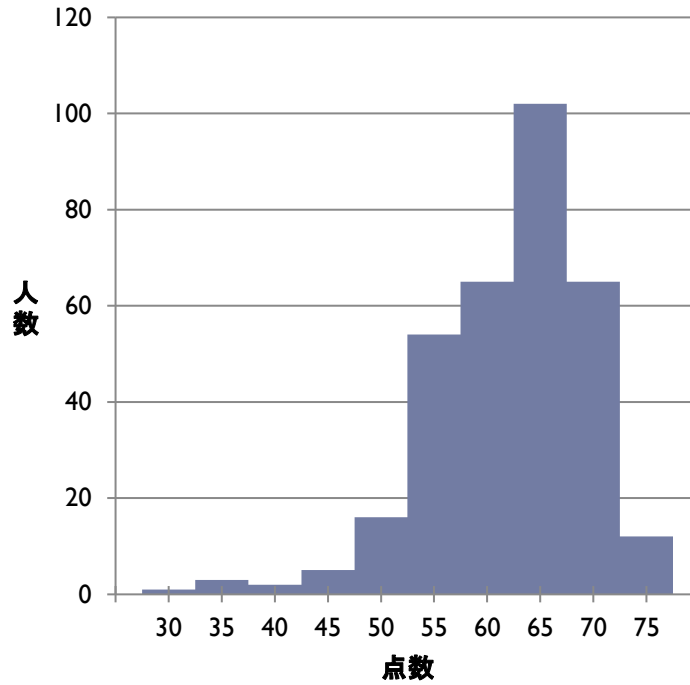
# 結果（基礎統計量）

\*満点は75点

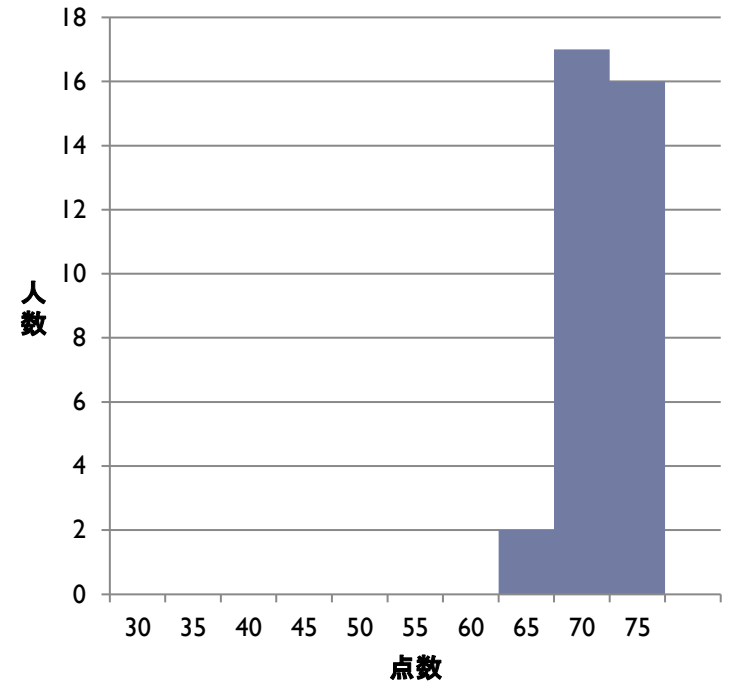
	データ数	平均	標準偏差	最大	最小
小4	622	27.9	12.9	62	0
小5	622	35.7	12.7	65	0
小6	630	42.1	12.5	72	0
<b>小学校計</b>	<b>1874</b>	<b>35.3</b>	<b>14.0</b>	<b>72</b>	<b>0</b>
中1	576	45.7	11.2	69	5
中2	605	51.5	10.6	71	0
中3	571	54.5	9.6	73	0
<b>中学校計</b>	<b>1752</b>	<b>50.5</b>	<b>11.1</b>	<b>73</b>	<b>0</b>
大学A	327	60.0	7.4	72	27
大学B	69	70.6	2.9	75	61

# 素点分布大学間比較

## 大学A



## 大学B

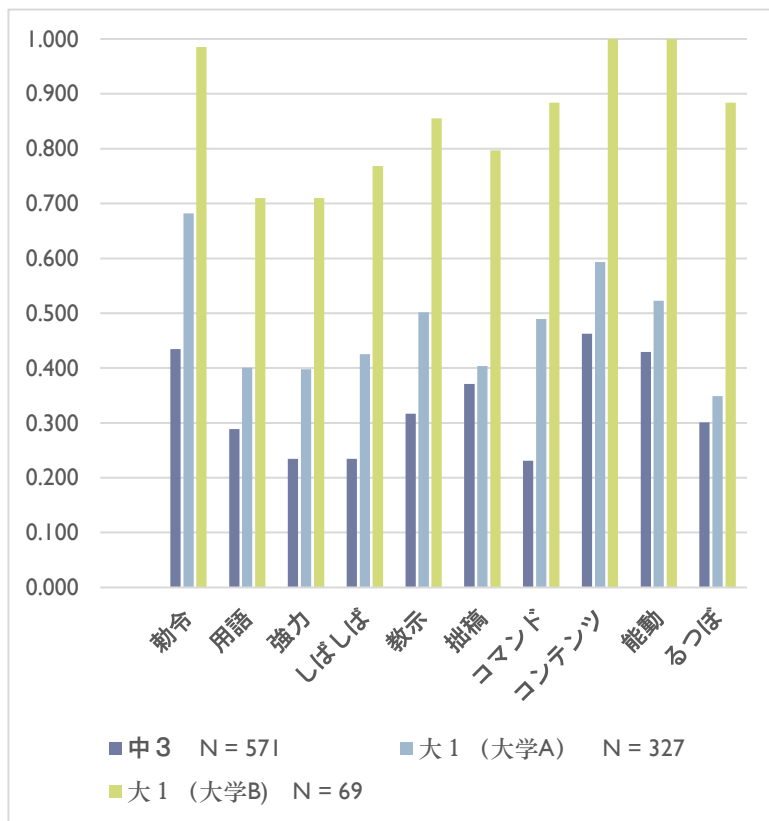


# 学年別／大学別標準偏差

	標準偏差
小4	17.2
小5	17.0
小6	16.7
中1	14.9
中2	14.1
中3	12.7
大1	10.5
大学A	9.8
大学B	3.9

- 学年が上がるにつれ、差は小さくなる
- 大学Aでは差が大きく、大学Bでは差が小さい
- 大学Aでは上位には高得点の学生もいるが、下位層も少なからず存在し、個人差が大きい
- 大学Bではほぼ問題なく習得していて、個人差が小さい

# 大学間で平均正答率に30%以上の差が出た語



- これらの語は大学Aの正答率が大学Bよりも中3に近いものが多い。
- 比較的頻度レベルの低い、難度の高い学術語彙が多い。  
(教示・拙稿・コマンド・コンテンツ・るつぼ)
- 一部には問題の選択肢の解釈(読解力の問題?)で差が付いていると思われるものもある。  
(用語・強力)



# 学年／問題レベル別正答率

	初級 15問	中級20問	上級20問	超上級20問
小4 N = 622	48.6	41.3	31.6	30.0
小5 N = 622	56.3	53.3	42.9	40.3
小6 N = 630	62.0	62.5	52.8	48.7
中1 N = 576	64.0	67.4	57.8	55.1
中2 N = 605	69.9	75.5	65.5	63.8
中3 N = 571	72.0	79.1	69.8	69.3
大1 N = 396	81.3	86.7	81.7	79.9

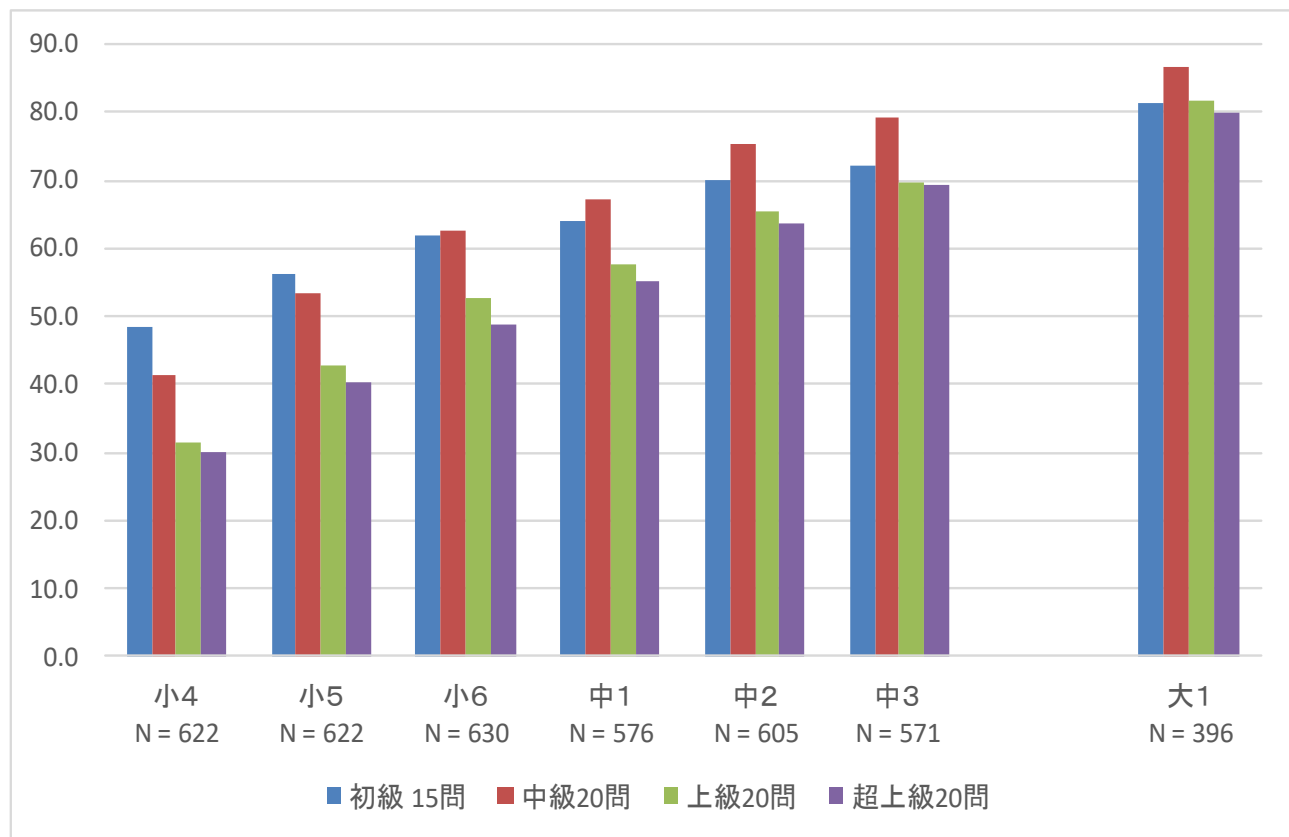
問題レベルは「日本語を読むための語彙データベース（松下2011）の頻度レベルによる。初級は5000位以下、中級は5001～10000位、上級は10001～15000位、超上級は15001～20000位を指す。

# 問題レベル別学年間の正答率の伸び

問題レベル	初級 15問	中級20 問	上級20 問	超上級 20問
小4→小5	7.7	12.0	11.3	10.3
小5→小6	5.7	9.3	9.9	8.4
小6→中1	2.0	4.9	5.1	6.4
中1→中2	6.0	8.1	7.7	8.7
中2→中3	2.1	3.6	4.3	5.5
中3→大1	9.3	7.5	11.9	10.6

- 小4・小5間、小5・小6間で伸びが大きい。
- 小6・中1間で小さいのは、成績上位層の児童が私立中学進学などで減っているためである可能性もある。
- さらに、学術系の語彙の学習負荷が、中学入学で相対的に重くなっている可能性もある。
- その後の中1・中2間で再び伸びが大きくなり、中2・中3間でまた小さくなる。
- 全体としては学年が上がるにつれて伸びが小さくなる傾向

# 学年／問題レベル別正答率（グラフ）



# 学年／問題レベル別正答率（考察）

- 小4、小5までは、初級レベルのほうが中級レベルよりも習得率が高いが、その後、中級レベルのほうが習得率が高くなる。



- 頻度の高い語にも習得の難しい語が含まれていることが示唆される。
- また、小学生のときに習得できなかった語が、それ以降、習得の機会を経ないままに未習得に終わるケースがあることも可能性として考えられる。

# 正答率が、中3と大学Aの差より、 大学Aと大学Bの差のほうが大きい語 (上位10語、正答率%)

問題レベル	初	初	上	上	中	中	超上	超上	中	超上
問題項目	深める	用語	座標	コンテンツ	関数	耕作	円錐	拙稿	能動	るつぼ
中3 (n=571)	68.1	28.9	80.4	46.2	81.4	61.5	84.6	37.1	42.9	30.1
大学A (n=327)	74.9	40.1	76.5	59.3	76.8	50.8	73.7	40.4	52.3	34.9
大学B (n=69)	100.0	71.0	97.1	100.0	100.0	71.0	97.1	79.7	100.0	88.4
a. 平均正答率の差 (大学A-中3)	6.8	11.2	-3.9	13.1	-4.7	-10.7	-10.9	3.2	9.4	4.7
b. 平均正答率の差 (大学B-大学A)	25.1	31.0	20.6	40.7	23.2	20.2	23.4	39.3	47.7	53.5
b-a (%)	18.3	19.8	24.6	27.6	27.9	31.0	34.3	36.1	38.3	48.8

- aがマイナスの語は中3のほうが大学Aよりも正答率の高い語 (⇒詳細は次ページ)

# 中3のほうが大学Aよりも 平均正答率の高い語

問題 レベル	超上	中	中	上	超上	中	超上
問題 項目	円錐	耕作	関数	座標	描画	曲線	割り 振る
差%	-10.9	-10.7	-4.7	-3.9	-3.3	-1.5	-1.3

- 数学に使いそうな語が多い？  
（大学Aほぼ文系学科）

# 大学Aのほうの中3よりも 平均正答率の高い語（上位10語）

問題レベル	超上	初	超上	超上	初	上	初	超上	上	中
問題項目	サンプル リング	強力	廃	兼任	記号	教示	しばしば	勅令	コマンド	交付
正答率の差(%)	15.9	16.3	17.3	17.8	18.1	18.5	19.0	24.8	25.8	35.1

- 小中学生レベルでは習わない、難度の高い語が多い
- 漢語や外来語が多い
- 教科学習や社会経験等で習得される「大人の語彙」

# まとめ 1

Q 1. 日本の大学生および小学校 4 年生から中学校 3 年生の学術共通語彙（松下2011）の習得レベルはどの程度か

=どのように発達していくのか

⇒ 小学校から大学まで段階的に少しずつ習得されていく

（50%未満 → 80%前後）

学年が上がるにつれ、個人間の差は縮小する

Q 2. 日本の大学生の学術共通語彙の習得レベルは、  
学校間、学生間でどの程度異なるか

⇒ 2 大学のみサンプルだが、この 2 校間の差は、特に一部の語について大きな差あり。全体としても小中学校の 2 学年分程度の差

⇒ 学術共通語彙の習得にほぼ問題のない大学もあれば、2 割以上の学生が中 3 レベルでとどまっている大学もある



## まとめ2

Q 3. 日本の大学生にとって習得されやすい語彙とされにくい語彙には、それぞれどのような特徴があるか

⇒教科学習や社会経験の中で接する頻度の高そうな語彙は習得している

⇒習得されにくい学術共通語彙の特徴

- あまりにも基本的な語彙で、理解の正確度が問われることもなく自明なものとして使われている語  
(正確な理解ができていない)
- 頻度が高くても抽象度の高い語
- 理数系語彙 (文系大学生)

## まとめ3

Q. 学術的な文献を読むことに支障が出るレベルの語彙量しか習得していないと示唆される大学生は、語彙知識の発達のどの段階で停滞しているか。

- 大学Aの21.7%が中3の平均点よりも低い点であった
- 小4から小6の平均点と同程度の者もいる
- 頻度の高い基本語彙であっても、理解度が十分でない者がいる
- 小中学校レベルで正確に習得できなかった語が後々まで習得されないことが一部にあると推測できる

⇒小中学生と同程度と考えられる時点で学術共通語彙知識の発達が停滞している

# 限界

- 2大学でのみの実施
- 高校生データの欠落
- 横断的なデータであること

# 今後の課題

- 多様な大学で実施
  - 大学生の学術共通語彙の理解度に関して一定の傾向を示せるのではないか
- 高校での実施
  - 小学校から大学生までのデータが揃えば、母語話者における学術共通語彙知識の発達の概要が示せるのではないか
- 縦断研究の実施
  - 発達に関してより信頼性の高い結果が得られる
- 有効な対策の考慮
  - より詳細な分析によりリメディアル教育の観点から、どのような語彙の習得に難しさがあるかを解明し、カリキュラムや教育方法への反映

# 参考文献

- 荻原廣(2016).「大学4年生の日本語の使用語彙は平均約3万語、理解語彙は平均約4万5千語」『京都語文』23, 276-298.
- 阪本一郎(1955)『読みと作文の心理』牧書店
- 佐藤尚子, 田島ますみ, 橋本美香, 松下達彦, 笹尾洋介(2017).「使用頻度に基づく日本語語彙サイズテストの開発—50000語レベルまでの測定の試み—」.千葉大学国際教養学研究, 1, 15-26.
- 田島ますみ, 佐藤尚子, 橋本美香, 松下達彦, 笹尾洋介(2016a).「日本人大学生の日本語語彙量測定の試み」中央学院大学人間・自然論叢, 41, 3-20.
- 田島ますみ, 佐藤尚子, 橋本美香, 松下達彦, 笹尾洋介(2016b).「日本人大学生は学術共通語彙をどの程度理解しているのか」.『リメディアル教育学会第12回全国大会発表予稿集』, 118-119.
- 中尾桂子・柴田実・中谷由郁・平林一利(2012)『「文章表現」指導内容再考のための一考察—学生の語彙量、記述上の形式的規則に見られる問題点の観察をもとに—』『大妻女子大学紀要—文系—』No44
- 林四郎(1971)「語彙調査と基本語彙」『国立国語研究所報告39電子計算機による国語研究Ⅲ』国立国語研究所
- 松浦年男(2015)「大学初年次の学生に対する日本語語彙力調査の試行」『北星学園大学文学部北星論集』52(2), 53-61
- 松下達彦(2011).日本語学術共通語彙リストVer.1.01  
<http://www.l7408ui.sakura.ne.jp/tatsum/list.html#jcaw> 2017年6月26日参照)

- **本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）「グローバル化に向けた日本語の語彙テスト開発」（課題番号15K02631，平成27年度～29年度，研究代表者：佐藤尚子）の助成を受けた**
- **基盤学力総合研究所山本典子氏および首都圏C市の教育委員会、C市立の小中学校の先生方、児童・生徒の皆さんの協力を得た**